

■学校経営のポイント

多面的な児童生徒理解を

喜名 朝博

授業中の子どもたちの反応は実に面白い。同じものを見ていても、見ているところが違ったり、同じ説明をしても想定外の理解をしていたり、多様な見方・考え方があるから協働的な学びが成立する。そして、仲間との「対話」によって自らの見方や考え方を深化させ、拡張させていくのだ。

児童生徒理解の認知バイアス

そんな学習指導や生徒指導を支えるのが児童生徒理解であり、教師の最も重要なスキルのひとつだ。担任は、特に小学校では子どもと共に過ごす時間が長いため、児童理解が進んでいると思いがちだ。しかし、本当にそうだろうか。教師の思い込みや決めつけはないだろうか。

教師はその経験年数に伴って関わってきた子どもたちの数が増えていく。そして、目の前の子どもたちと過去に出会った子どもたちを重ね合わせて見てしまうことがある。この子は過去に担任したAさんに似ていると思った瞬間に確証バイアスが働き、それを裏付けるための情報だけを集めるようになる。さらに、無意識のうちに「この子はこんな子」と決めつけ、その情報をアップデートしないこともある。児童生徒理解とは、その教師の理解であり、子どもたちのありのままを捉えているわけではない。見えているものは、あくまで自分が解釈した結果でしかないということを踏まえて児童生徒理解を進めていきたい。

教師の対話で多面的理解を

だからこそ、教師にも「対話」が必要なのだ。担任だけでなく、学年や授業を担当する教師、養護教諭や管理職など、その子に関わる教職員の解釈を共有し、深めるための対話の場を大事にしていきたい。

授業力向上のために行われる授業研究は、格好の対話の場となる。同じ子どもを見ていても、教師に

よって見方や解釈が異なる。この多様性への気づきが、教師のスキルを高めることになるのだ。ベテラン教師の経験に基づく理解も参考になるが、子どもたちと年齢の近い若い教師の見方が核心を突くこともある。子どもたちの分かり方、興味・関心の方向性、認知特性など、より多くの人々がその子を多面的に理解して共有し、対話することで児童生徒理解が深まり、その子の全体像が浮かび上がってくる。

子どもたちの多面性

学校ではしっかり生活している子が、学童保育の場ではすっかり緊張感がなくなってしまうことがある。その子なりにバランスを取っているのであって、どちらもその子の本来の姿である。子どもたちは、置かれた環境に合わせて見せる姿を変えるのだ。

人によって態度を変えることに大人は寛容ではないが、相手の立場や反応、自分との関係性を読み取って行動を自己調節している姿でもある。子どもたちが大人に見せている姿は、その子のひとつの側面でしかなく、そのことを理解していないと話がかみ合わなくなる。学校での様子を保護者に伝え、「家ではそんなことはない。学校の指導が悪いからだ」と受け入れられないことがある。もし、その子が家庭でありのままを出せていないとしたら、家庭内に緊張感があるのかもしれない。

本学でも教育実習が始まった。実習中、休み時間は何をおいても子どもたちと遊ぶように伝えているが、それは子どもたちとの関係作りのためだけではなく、そこで見せる子どもたちの別の姿を理解するためでもある。

子どもたちは常に自分のことをもっと知ってほしいと願っている。多面的な児童生徒理解と対話によってその期待に応えていこう。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

●子どもも大人も安心していられる「子どもが主語」の学校のつくりかた。《好評発売中！》

「子どもが主語」の学校へようこそ！

森万喜子【著】 四六判／定価 2,420 円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>をご利用ください。

